

蛭どんじいさんと囚徒にあさん

お大塚おおつかといわれた多道屋敷たどうやしき(下千子林水井)には、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある晩、通りすがりの六部坊むくべぼう(遊礼)に一夜の宿を頼まれました。夕飯がすんで、くつろぎながら六部坊は、ほそほそといかにも大事な話を聞かせるかのように、お金のこの話を始めました。「京都にや無限の鐘というのがあるでいう…」「その鐘をつくると金はこのるんじやが、とれた米が蛭んぼうになるとな…。」

おじいさんとおばあさんは、不思議な話を感心しながら真剣に聞きました。おばあさんはうまい話に考えこみ、「金がこのる」「ふくん」とひとりごとをつぶやきました。しばらくして、心にきめたとばかりに「ボン」と、手をたたき「じいさんや、京都に行ってその鐘をついて来なされ」、おじいさんも考えていたが、その気になって、「うん、うん」とうなづきました。

よく朝、旅支度をしたおじいさんは、元気に京都に向かって出かけました。長い日におばあさんは、首を長く



して待つていました。

京都に着いたおじいさんは、六部坊から聞いた話をするると、寺の人も同じ話をしました。「つこうか…つくまいか…」ずいぶん迷いましたが、とうとう鐘はつかずに帰りました。

「はあさん、けえったぞ。」「鐘はやっぱりつかん方がえ

え。」するとおぼあさんは「何…意気地なしめ。」と、一戸
でわめき、そばにあった鉄瓶てつびんをおもいっさりたたきこわし
てしまいました。

するとおぼあさんのその強い業わざの一念が叶かなってか、おも
しろいほど金にのこりました。しかし話し通り米は蛭にな
ってしまい、広い屋敷が蛭んぼうだらけ…。困ったおじい
さんは、手おけて近所中の庄んぼに捨てました。村人は蛭
だらけの田んぼに大さわぎ…「蛭どんじじいめ」と、のの
しりました。

その後、おぼあさんは凶業な気持ちを反省し、参道屋敷
にあった立派な門を、清浄院しよんじやういんに寄付したということです。

※蛭…油・沼・水田などにすみ、魚類や貝類ときには人畜などの皮
膚に吸着して血を吸う動物。

